

Goshin Moro

Supporters Club News Letter

01

茂呂剛伸後援会 会報

2015/09



縄文の響き、未来へ

茂呂剛伸後援会、発足!



インタビュー vol.1

受け継いでいく響き

横内龍三さん×茂呂剛伸

北洋銀行 会長
茂呂剛伸後援会 会長

司会・撮影・構成 ウリュウ ユウキ

積極的な応援団の一人として

・・・横内さんが最初に茂呂さんとお会いになった、そして音楽をお知りになったきっかけをお聞かせください。

横内龍三さん 今でも鮮明に覚えているのは、北海道の縄文遺跡を東北各県と共同でユネスコの世界文化遺産にしようという「北の縄文道民会議」に所属していて、その講演会で茂呂さんが演奏をされました。家内と一緒に聞かせていただいたのですが、まずその音の響き、ひとつの太鼓から実に様々なリズムが出るといこと、低音が響いて自分の体に伝わってくることに感動しまして。演奏の合間合間に茂呂さんが小さい頃から和太鼓を叩き、アフリカに行かれてジャンベを体得され、こちらに戻って縄文の焼き物からヒントを経て「縄文バズーカ」を制作され、それに北海道のエゾシカの皮を使うという話を聞かせていただいて、本当に感動したんですね。これは北海道で生まれたひとつの新しい響き・文化なので、大したことはできないんですけど、その感動をさらに味わうために、そして皆さんに知ってもらいたいという気持ちになって、茂呂さんの演奏会には時間のある限り、機会あるごとに聴きに行かせていただいてきました。その第一回目にお会いした時に名刺交換をさせていただいたんですが、私どものお得意先の息子さんだということがわかって(笑)。そしてもっとびっくりしたのは北洋銀行のお取引先の会で「はまなす会」というのがあるんですけど、そこで(茂呂さんのお父様から石井純二頭取が縄文太鼓をプレゼントされて、頭

取室に飾ってあったのです。ひとつのエポックは時計台での演奏でしたね。一週間やるというので計画を立てていく中で、私も会場の手配で札幌市さんをお願いに行ったりとか…

茂呂剛伸 当時の札幌市長のところに直に。なんて光栄なことだろうと…

横内 一聴衆というだけでなく積極的な応援団の一人として自覚するようになり、いろいろ機会をとらえては経済界の集まりの時に茂呂さんに来て叩いていただきました。後援会の会長が私に回ってきて、私で大丈夫なのかなと思っていたりするんですけども、茂呂さんに札幌・北海道発の新しい文化の体現者として飛躍していただきたいと思ってお引き受けしました。演奏活動も出雲大社や東京などで行って、知られてくるようになってきて、そしてもう一つ私がいいなあと思っていることは、お弟子さんがだんだんと広がってきているということですね。自分で叩くということだけでなく、ピアノや舞踊・ダンス、光との組み合わせとか、新しいものを絶えず生み出そうとしておられて。そのベースはジャンベとか太鼓の音なんですけども、それがいろいろなかたちで他の文化とコラボしている。これが茂呂さんの活動の中で特筆すべきことですし、私のみならず後援会の皆さんも感動しているところだと思っています。

北海道に暮らす喜び、変わらない感受性

・・・北海道・東北の縄文遺産群がいま世界遺産の登録をめざしていますけども、これが北海道にもたらすものはどんなことだとお考えでしょうか。

横内 それぞれの土地にそれぞれの文化があって、地方は多かれ少なかれその影響を受けて今日に至っていると思うんですね。私は北海道で暮らすまではこんなに縄文遺跡がたくさんあるということ知らなかった。もっと驚いたのは、縄文時代がずっと北海道にあって、本州が弥生時代に入っていった頃に北海道にはそれが及ばず、続縄文、オホーツクの文化…他の地域とは違った独自性があるんですね。北海道は歴史的にまだわかっていないことが多いのです。それだけ日本の中でも独特の歴史文化をたどって出来上がってきている。北海道に今暮らしている人の多くは私を含めて各地から渡ってきた人たちだけでも、地域の歴史と文化を知って、ここで暮らす喜び…ずっと北海道でこれまで生きてきた人たちのことを感じながら生きている。北海道が好きだという人は、北海道で生まれた人ばかりでなく本州にもたくさんいるんですね。こういう人たちは何らかの形で北海道を意識している。北海道の縄文…他の地域よりずっと長く続いたこの文化のあり方が、北海道の地域性を感じる一つのよすがとして我々の日常生活の中に流れ込んでくるものであれば素晴らしいです。

地域的に近い「東北と北海道の遺跡群」として私たちの祖先が暮らした、作り出した足跡が国からも世界からも認められることは、北海道に生まれた人もそうでない人も、北海道への意識を高めることとなります。ユネスコの世界遺産に登録してもらおうという運動は素晴らしいことです。縄文は我々の現代の暮らしから一気にさかのぼることなんですけど、私たちが博物館などで見てみると、そこに喜び、悲しみ、

恐怖…いろいろなかたちが織り混ざっている。現代の暮らしと人間の感受性は変わらないものがあると思います。

茂呂さんの縄文時代と同じ手法で作る土器と、北海道のシカの皮で生み出される音は、時代を越えて私たちに響いてくる。個人的に私はそう理解をしているところで



ものの豊かさと 心の豊かさと

…横内さんは北海道を経済の面から見
つめ続けてこられたわけですが、一方で文
化の創造を両輪にとらえ、例えばクラシッ
ク音楽や環境保護への支援をされています。
経済と文化の関係をどのようにとらえて
おられますか。

横内 経済活動というのは本来人間がい
い意味で豊かに暮らせる土台を作り出して
いくことです。これまでの経済の発展は、
人間の暮らし方の多様性と質を高めること
に寄与している。それは「目的」ではない
と思うんです。精神的にも物質的にも豊か
な暮らし。それは一人の人だけがというの
はダメなんですね。人間全体が豊かになる
ことを支えるべきです。ところが現実の経
済の発展を歴史的に辿ってみると、本来
豊かさを求める中で、その豊かさを潰して
くる…その典型が近世でいえば公害であ
り乱開発です。目的を持ちながらやってき
たことが豊かさを潰していることに我々は
気付かないといけません。もちろん経済活
動の全てが悪いのではなくて、そういう面
がある。経済的変化のスピードの激しい時
代、よくよく我々一人一人が注意しないと、
壊す動きを強めてしまうことになりかねな
い。

環境保全、特に私が興味を持っている生
物多様性の保全も、単に地球上をそのま
まにしておけばいいというのではなく、
我々人間が暮らす豊かな環境を提供してく
れるものたちを通じて豊かな気持ちになる
ためです。我々は経済活動だけではなく文
化活動を積み上げていく。経済活動が、人
間が積み上げている文化活動を壊しては
いけない…これを最近非常に強く感じて
いるところです。

見渡してみた時にどこが壊れているのかと
いうことに普段我々は気付かないのです。
だけれども、明治以降記録に残っている
写真を見ていたりするだけでも、こんなに
変わってきたんだということがわかるわけ
です。

…特に北海道は開拓使が当時の最新
テクノロジーであった写真を導入して、原
野から街や農村ができていく様子を全て
記録したのでそれが手に取るようにわか
るわけです。

横内 北海道に移住してきた人たちが開
拓の中から経済的な価値を生み出し、生
活ができるようになってきた中で、壊しすぎ
ることによって自分たちがせっかく築い
てきた豊かさが一緒に壊れていってしまう
ことのないように。極端な場合は国と国と
の戦争のような壊れ方もあるが、我々の生
活の中から壊すことのないように…それは
一人一人が守れることなんですよ。その
象徴がシマフクロウです。生きとし生ける
ものが一度この地球上から絶滅してしまう
と、今の我々人間の科学では再現すること
ができない。種が減びるということはそう
いうことなんです。自分たちだけがという
考えでは最終的にその繁栄は失われます。
シマフクロウをその象徴として、我々が生
物多様性の保全の大事さに人々が気づい
ていくようになればと思います。

絶滅したものが復活しないという面では、
北海道にはエゾオオカミというのがいたの
ですが、明治の開拓の時に全部害獣として
絶滅して、その挙句に生態系が崩れて今度
はシカが増えて…ということが起こってい
ます。それはそれとして、じゃあ復活させよ
うとしても絶滅してしまうとうできない。
シマフクロウは現在140羽くらいいると言
われていますが、これはもう微妙な環境を
必要とするんですよ。巣や食べ物ですと
か。シマフクロウを生かす環境が北海道に
だんだんなくなってきた。今以上に失
われないう、ここでストップ!という気持
ちで一人ひとりが活動したい…というのが
(会長を務めている)「北海道シマフクロウ
の会」の発端です。

茂呂 私も会員にさせていただく中で、シ
マフクロウの保護も縄文文化を広めること
も結局は心のあり方という観点で、ここま
での物質・経済の豊かさから、ここからは
横内会長がおっしゃった「心を大切にした
生き方」を文化活動を通じて発信してい
かねばと思います。

私は何かを作り上げてそこにある価値を見
出すことは外部に発信してそれが再び戻
ってくることによって再認識されると思う
のです。北海道で作上げた文化が東北と
力を合わせて日本全体に染み渡り、それと

合わせて海外の方に理解いただくように
言語を超えた「音楽」という表現で発信し
て、過渡期にある北海道で心で生きる者と
して世界中に発信する。そのためにはシマ
フクロウを保護していかないとやっている
こととやっていることが違うとなってしま
います。

横内 まさにそういうことなんです。シマ
フクロウが一つの象徴であって、その育む
環境には木も川も魚もあって。その一つ
一つから我々は少し過去を反省し振り返
つてみる必要があるのではないですか。も
のの豊かさはある程度我慢できると思う
のですが、文化の豊かさは我慢できないと
思うのです。みんなどこかでものだけで
ない活動に…例えば若い人たちが歌に熱狂
したりするのはその発露ですよ。その点
で物質と心の両面をしっかりと見ていかな
ければならない。物質は時に人間の嫌な面
を掻き立てるかもしれませんが、文化は人
間のいい面を育むと思うんですよ。心の
面を忘れないようにしていかないと経済活
動もいい活動にならない。今、企業の社会
的責任がよく言われるようになってきてい
ますが、いずれはこういう考え方が主流に
なっていくのではないですか。その流れ
を後押しして、まずは北海道の中で一つ
一つ実績にしていきたいです。

茂呂さんの活動の中で、縄文の遺跡の土
を使った太鼓で演奏する構想をされてい
ます。心は物質よりもどんどん広がって
いく…その典型的なケースとして、お話を
伺った時に感激したんですね。文化の力は
すごいと。そういう活動を通じて、我々は
東北へのシンパシーを深めているんですよ。
お互いにそういう風になれば、人間の
暮らしの中にプラスになると思います。

茂呂 北黄金貝塚(伊達市)に行ってきたの
ですが、そこには貝塚の上にホタテガイが
真っ白い石畳のように配置されていて、そ
の下には人骨も埋まってお墓になって
いるんですね。先日許可を経て考古学者
の青野友哉さんとそこで演奏をさせていただ
いて。

私が現地に行くことは、すべてが土に帰
っていくことです。土には縄文人達の記憶が
あって、それを採取することで縄文人達が
太鼓に新たな命をもって現代に語りかけ
る。風土なこと…アイヌ文化の前に続縄
文文化があって、現代の北海道文化があ
って。自分たちが生まれた土地を愛するた
めには、知らなければいけない、興味を持
たなければいけない。そのひとつのきっかけ
として、私は遺跡に行きます。遺跡の周辺
にもコミュニティがあって、外部から知る
ことによって内部の刺激にもなる。18の遺
跡をつなぐことによって私は心の連携がで

きると思うのです。縄文人達は互いに交流があったとお聞きしているので、現代の音楽の交流によってそれがひとつになる。この心のつながりで現代に語りかける…それが現代人の心のあり方を変えるのではないか、そして未来に向かう時に過去から何を読み解いて選択するか、物質だけではない心の主軸に選択するコンテンツを提供していきたいのです。

横内 この流れの中で茂呂さんが試みておられるいろいろな文化とのコラボによってそれが広がっていくんですね。



過去を振り返り 未来に謙虚に

・・・最後に「受け継ぐ」ということについてお伺いします。現代に生きる私たちはいにしへの文化を未来につないでいく結び目に立っていると思いますが、北海道に暮らす私たちだからこそできることは何でしょうか。

横内 なかなか一つ一つこれということは難しいかもしれませんが、私どもの祖先に対する畏敬の念を持ち、自分の今の姿を見つめ直せば、それが未来につながっていくと思います。自分で体験しない過去に対する思いを馳せるということが、未来を決めていくと思うので。

そんなに人間の暮らしに非連続的なことは起こらないと思うんです。つながったものとして私は認識しています。今皆さんから「北海道産のものは美味しい」と言っている。それは昨日今日生まれたものではなく、ずっとつながってきた中から生まれている北海道の宝です。そこに思いを馳せ、「これ以上破壊をしない」「過去を振り返り、未来に対して謙虚になる」。茂呂さんにとっては縄文とのつながりが太鼓というツールを通しての活動になっていて、じゃあ横内は何かといえば、たとえば現在の生物多様性を守ることが必要だと思うのは、やはり過去を振り返ることによって未来につなげていくことを期待しているからです。そこにカメラがあるわけですが、写真を撮っている人たちが瞬間瞬間を記録している中で、一人一人の暮らし方の中に過去から受け継ぎ未来に引き継

ぐものがあるわけですね。

・・・それぞれの中にある受け継ぐものを大事に守っていく、そのための心が豊かになるきっかけとして茂呂さんの活動がこれからも裾野を持ってもっと広がっていく。

横内 茂呂さんの活動の中に我々が深く感動し輪が広がることによって、現代に生きている我々が縄文の響きを共感できたという思いが我々を幸せな気持ちにしてくれるわけで、私も後援会を通じて茂呂さんに頑張ってもらっていて、さらにさらに、未来へ未来へ発展させていってほしいですし、お弟子さん達も茂呂さんを越えていく人が出てくれたら…。文化ってそういうものですね。すぐには越えられないかもしれないけど、その裾野が広がっていくのは素晴らしいことです。演奏会でもお弟子さんが来て合奏する時に少しずつ新しい顔が拝見できることは我々も嬉しいです。

茂呂 次の世代に残る文化を北海道から創造する。今まで表現者の先輩達は外からの文化をここで育ててきたけれど、ここから作り出す、そして発信する…私は縄文太鼓を通じ、舞台芸術として北海道を発信します。そこには雇用が生まれ、プロサッカー選手や野球選手みたいに憧れ目指す人が生まれることによって生きる方向性ができます。一部の人たちがそれを勝ち得る競争社会的な構造も必要ではあるけれど、私は教育や医療福祉なども通し、原始的な表現だからこそできる役目も作ってきたい。

また、アーティストと呼ばれる人は収入がなかなか安定せず、たとえば家を建てる時に住宅ローンがなかなか通らなったりします。でも表現をする、人に表現を教えることがこの北海道で仕事になることによって、この仕事を目指す人が出て、家を建てたいなあ、何か始めたいなあと思った時にご融資をいただく。表現者の仕事としての社会的な地位を確立することを私たちの世代は先輩達から受け継いでいます。それによって若い世代達が安心して表現でき、そして親たちが安心して応援できる…「心」を主軸とした活動に経済が繋がらないと、発信したものが根付かない、100年・150年続くものになりません。北海道が200年・300年を迎える時にここから生まれた表現がこの地の暮らしにしっかり根付いている…そういうことを一生をかけて自分の活動で得るご縁の中で形作っていききたいと思っています。

横内 まさにその通りだと思います。ぜひ今後も応援しますので、活動をしっかり根付かせていっていただければと思います。

茂呂 私は横内会長との出会いから、昨年の「札幌国際芸術祭2014」の活動な

ど、自分だけでは絶対できなかったことを会長のお人柄によって「よしっ、横内会長が応援しているんだったら茂呂に手を貸してやるうか!」と周りの方々に思っていただけでした。一つの出会いから「私は何ができるかな、周りの人たちはどう関わってもらえるかな」と思ったことが形になり、それが消費ではなく継続性のあるものになっていけばいいなと思っています。

横内 ぜひそうなることを祈っていますし、太鼓の輪が広がっていくのがいいと思うんですね。

茂呂 先日横内会長には太鼓を作っていただきました。乾燥が進んでいて、焼く〜皮を張って叩いていただくタイミングがありますので、ご自分が作った太鼓の音色の感想をお聞かせいただいて、そしてセッションをしたいですね。

横内 楽しみですね。

茂呂 私は、横内会長が「応援するよ」とおっしゃってくださる際にご自分の言葉や体験を添えていただけること、それがとてもありがたいです。これからも一緒に楽しみご参加いただく…それが一番輪が広がっていく根源だと思います。

横内 いろいろと声をかけて茂呂さんの音を聞いた人が「こんなすごいものがあるんだ」と異口同音におっしゃるので、大勢の人に接していただくようにするのが我々応援団の役目ではないかと思っています。

・・・たくさんのお話を聞かせていただいて、横内さんと茂呂さんのこれまでの経験や北海道への愛に重なるところがあり、受け継いでいけるものを見出せる時間だったと思います。本日はお忙しい中、本当にありがとうございました。



(北洋銀行本店にて)



響き合う、 新しいリズム

茂呂剛伸後援会 発足式フォトレポート

2015年4月18日、土曜日。時計台の隣・札幌すみれホテルにて、発起人の皆さまのお声かけにより盛大に開催された茂呂剛伸後援会の発足式。

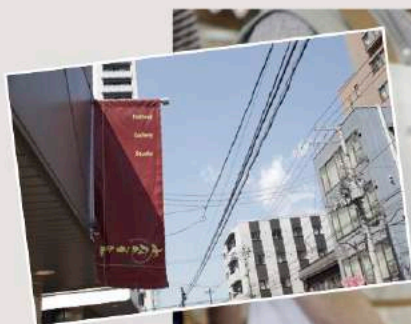
縄文太鼓を縦軸に、映像・舞踊とのコラボレーションを横軸に。多彩な演出、そしてお客様参加のプログラムとともに繰り広げられた発足式で華々しくスタートを切りました。その一夜を写真で振り返ります。

映像制作 端聡 / 写真 馬場 恭輔 / 日本舞踊 藤間 蘭翔 / MC 福津 京子 / 舞監 阿部 一恵
音響 K,S SOUND / 映像 プリズム / 記録動画 吉川 貫一 / 記録写真 ウリュウ ユウキ





縄文太鼓を つくる



札幌・円山にある、北海道陶芸協会の工房『円山陶房』。本格的な設備を持つこの工房で、5月23日(土)、ここで縄文太鼓の本体部分をつくるワークショップを開催しました。土を素手でこね、積み上げ、縄文をつける。いにしえの人と同じように作られた縄文太鼓はどのような響きを放つのでしょうか。完成した縄文太鼓は実際に演奏する予定です(本会報でもレポートします)。

●円山陶房…札幌市中央区大通西23丁目2-20 サンシャイン円山1F
<http://maruyama.hokkaidotougei.com>



制作の流れ



①タオルに包まれているのが粘土(乾燥防止のため)。ろくろやへら、そして文様をつける縄も用意します ②粘土をこねます ③長い棒状にします ④ろくろの上で一周させ輪のようにつなぎます ⑤これを繰り返して上へと積み上げます。円筒形になりがちなので形を整えます。つなぎ目の重ね方がコツ ⑥縄を使って文様をつけます ⑦これを窯で焼き、エゾシカの革を張って完成です

制作の様子



参加された方の声

●久々に土に触った気がします●だんだん形になっていくにつれ、テンションが上がりました●縄文の名の通り縄で文様をつけることで太古の人の思いに触れた気がします●実際に太鼓をたたいてみるのが楽しみになりました

皆さまの楽しい表情がとても印象的なワークショップとなりました。ご参加ありがとうございました。後援会ではこれからもさまざまなイベントを開催する予定ですので、ぜひご参加ください。

北黄金遺跡で縄文太鼓を演奏

本誌のインタビュー(3ページ)内でもご紹介した北黄金貝塚(北海道伊達市)にて、遺跡の中で眠る私達のご先祖である縄文人への敬意と感謝を込めて演奏致しました。ユネスコ世界遺産認定への機運を盛り上げたく、今後も各遺跡にて演奏が出来れば幸いです。

*演奏の映像を後日茂呂剛伸Webサイトにて掲載いたします

写真:小林 幸王(レザボアプロダクション)



information

後援会からのお知らせ

最新の情報は茂呂剛伸Webサイトをご覧ください

茂呂剛伸定期演奏会2015

8年目を迎える茂呂剛伸の定期演奏会。今年も3回に亘り、札幌・大通の"CAI02"を舞台に繰り広げられています。感謝の想いを込めて、ジャンペプレゼントじゃんけん大会も毎公演行います。

12月の最終公演に是非ご来場頂き、肌で演奏をお楽しみ下さい。

■日時:12月4日(金) 18:30開場 / 19:00開演 (6月6日、8月29日、12月4日開催)

■会場:CAI02(シーエーアイ ゼロツウ)/

札幌市中央区大通西5丁目 昭和ビルB2 (地下鉄大通駅1番出口)

■料金:5,000円(税込)

■定員:50名 ※ 全席前売り制(全席自由)

■お問合せ・チケット販売:moro-t@mirai-t.com



これからの会報発行予定

創刊号を最後までお読み下さいまして、ありがとうございます。

本誌は年3回の発行を予定しております。親交のある方々との対談をはじめ、茂呂剛伸の活動をご紹介しますので、今後ともよろしくご愛読のほどお願いいたします。

■vol.02...2016年1月下旬発行予定 2016年の活動紹介

■vol.03...2016年4月下旬発行予定 後援会発足1周年・夏の活動について

*内容は変更となる場合がございます

茂呂剛伸後援会 ご入会のお誘い

縄文の響きを未来へ...そんな思いをより多くの人々に伝えていく茂呂剛伸の活動をより近くで支えていただけるよう、「茂呂剛伸後援会」を本年4月に発足いたしました。

本会報のお届けやイベントへのご案内、チケットの優先販売等の会員特典がございますので、是非ご入会いただきますようお願い申し上げます。

【入会のお問い合わせ】FAX 011-200-2113・メール moro-t@mirai-t.com *茂呂剛伸後援会ご入会の旨、タイトルにお書き添えください